



三到図書館 ニュース

2008年4月発行

No.62

J. F. Oberlin University Library

巻頭インタビュー
データベースと図書館
留学生活と図書館
NGOと図書館

教養と図書館
読書と図書館
図書館読書運動プロジェクト
図書館紹介・利用案内・蔵書コーナー

巻頭インタビュー

学生時代は感性を磨く絶好の機会

副学長・大学院教授 寺井 泰明

私が大学生の頃は学生運動全盛期で勉強どころではありませんでした。それでも本を読んでは仲間とカントがどうした、サルトルはどうだ、マルクスがどうしたなどと青臭い議論を闘わせていました。そんなことは当時の大学生ならあたりまえだったけれど、私はどちらかというと中国や日本の古典を読むのが好きでした。『水滸伝』『三國演義』『戦国策』など、策略や権謀術数渦巻く世界など息を呑む思いで読みました。血の気が多かったのかな。だから『紅樓夢』なんか読んでもすぐ眠たくなりました（笑）

私は都立高校の教員を14年間勤めてから大学で教えるようになりました。その間1981-1983年にかけて、中国の吉林大学で外国人専攻（外国人専門教員）として勤務する機会を得ました。あの頃は文化大革命の傷痕がようやく癒えてきて、中国の大学生はみな学問に飢えていました。中国の大学生たちの中には青春時代に勉強する機会を失い、いったん社会に出てから大学に入ってきた大学生もいましたよ。どんなことが待っているのかと思って中国に赴任しましたが、それはもうすごい経験が待っていました。

私は日本語の教師として赴任したので、中国人の学生相手に日本語で授業をします。ところが授業が終わっても研究室に帰れない。それどころか授業と授業の休み時間にも研究室に帰れない。とにかく学生たちが次から次へと私に質問をするために長蛇の列を作る。吉林大学の日本語教育レベルはとても高く、1年目は中国人教師が日本語を教え、2年目に私たち外国人教員が教えるのですが、とにかく授業中はいっさい日本語しか話さない。それでもこの熱気！日本語専攻の学生たちは学問に対する情熱に満ち溢れていました。だから、次の日に何を質問されるか、質問されたらきちんと答えねばならないという気持ちになり、私も一生懸命勉強をしました。教師も学生も一丸となって勉強漬けの毎日でしたよ。なにしろ教師の私が予習復習するのに精一杯で、おかげで大学の図書館でゆっくりと本を読むなんてことはできませんでした。学生に何か紹介できる書物がないかと探しに行ったりはしましたが、当時の日本語関係の図書は貧弱で学生に紹介できるようなものは少なかった。現在と違って容易に外国の書物を入手することもできませんでした。まあとにかくこれは私にとって教師冥利に尽きる経験でした。

私からみなさんに言えることがあるとすれば「古典を読みなさい」ということです。『水滸伝』や『三國演義』のように血湧き肉踊る面白いもの、深淵な哲学・思想書など何でもいい、あとからじ



わじわと効いてくるような書物です。古典を通して世界を認識する、ということがあります。例えば松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」という俳句を知らなければ、古池を見ても何も感じない。何の感動も生まれない。それどころか「古池」という認識も生まれない。地面に水がたまったものを見ても、それを「水たまり」と思うか「池」と思うか・・・この俳句を知っているだけで、普段の何気ない日常を芭蕉の目で認識することができます。文学書でも哲学書でも思想書でもいい。古典、あるいは書物を読むことによってみなさんの世界は確実に広がります。

「万緑叢中紅一点」という言葉があります。これは北宋の詩人・王安石の詩の一節と言われ、また「紅一点」という言葉の由来とされていますが、この一節を知っていれば、一面の緑のなかに赤い花がひとつだけポツン、と咲いている風景を観て、「ああ『万緑叢中紅一点』だなあ、『紅一点』というのはこういうことなんだなあ」と感じることができる。自分の感性なんてたかが知れています。感性は磨かなくてはなりません。書物を読んで考えていろいろと思いを馳せることがだいじなんです。まさに読書は世界を認識するための手段です。

また「文章を読んできちんと理解する」ということもぜひやってみてほしい。例えば百科事典でひとつの事項を調べても、ひとつひとつの単語の意味まで理解する。理解できなければそれらを納得できるまで調べる。そういう丁寧な作業をやってみると、いままで自分がいかに文章を曖昧に理解していたかがわかる。理解し納得したあとには満足感も味わうことができる。図書館を利用してそんなことをしてほしい。ひとつのことを調べたら、その理解が完全にできるまで徹底的にやる。少しずつでいいからやる。調べ方がわからなければ図書館の司書に聞く。図書館には書物がある。謎を解く鍵がある。

学生時代はとにかく読書をしてください。学生時代は人生のなかでいちばん贅沢な時間を持てるからです。（2008.1 22）

聞き手・構成：佐々木俊介（図書館事務課）

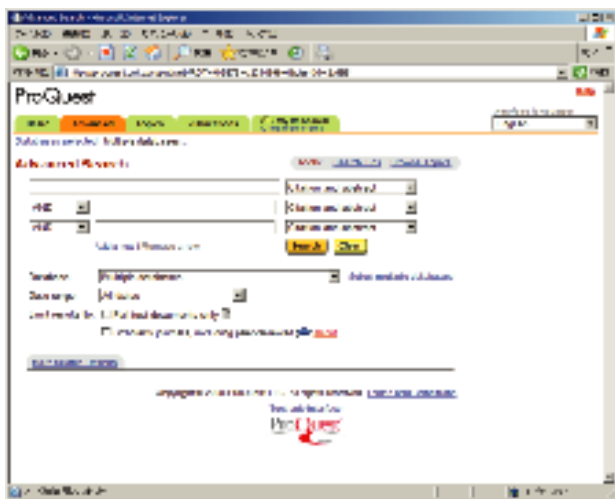
データベースと図書館

心理学と文献検索の関係

大学院教授 石川 利江

これまで、疑問に思ったことを調べようとしたらどうしてきたのか。最近では、多くの人がインターネットを使って簡単に調べているようである。実際、私自身も手軽に検索サイトを利用している。その結果、簡単に知ることができたという思いと別に、本当かなと一抹の不安も感じる。日常的な知識ならば多少間違ってもまあしかたないと思うことができる。私は知人ぞ知るアバウトな人間であることだし。しかし、自分の専門としている心理学に関しては、さすがにそうはしたくない。では、どうやって専門的な疑問を解決するのか。そろそろ本題に入ってきた。本文は図書館ニュースに掲載されるのである。そうだ。図書館のデータベース検索システムを使おうという話である。

大学のホームページを開いて図書館のページをみると、いろいろメニューがある。その中で私が最も利用しているのがデータベース検索である。特に『ProQuest』と『PsycINFO』はいい。世界の心理学の研究成果を即座に示してくれる。自分が興味を持ったテーマがどのくらい研究されているのだろう、どんな結果が出ているのだろう、今後やるべき価値はあるのかという疑問に答えてくれる。1つ、2つ関心の中心になるキーワードを入れて検索する。ワクワク、ドキドキしながら待つこと数秒、あっという間に世界中の研究結果が示されるのだ。膨大な研究結果が示されることもある。その数に圧倒されて、もうやることなどなにもなさそう・・・なんて考えない。反対に、1つも文献が示されないこともある。そんなときは、もう少し関心の的を絞るいいチャンスでもある。キーワードを加えてみたり、変えてみたりといろいろ試みていくのだ。自分の考えているのに近い文献がいくつか見つかった時には、やった！と感激である。



昔、私が学生だったころ、こんなりっぱな検索システムはなかった。図書館の書棚にずらりと並んだ『サイコロジカル・アブストラクト』という書物から関連のありそうな文献を探した。その分厚い本を開いては閉じを繰り返していると、なにやら陰鬱な気分になっていく。自分の探す宝物はくすんでいってしまい、どこに隠されているのかわからなくなっていくのだ。やっと見つけた文献のタイトルや著者名を書き写し、書棚の間からノソノソと這い出して雑誌コーナーに移動していく。そんな繰り返しをしていた。楽しかったのだろうか。覚えていない。

自分の探す宝物はくすんでいってしまい、どこに隠されているのかわからなくなっていくのだ。やっと見つけた文献のタイトルや著者名を書き写し、書棚の間からノソノソと這い出して雑誌コーナーに移動していく。そんな繰り返しをしていた。楽しかったのだろうか。覚えていない。

大学院生になったころだろうと思うが、そんな私に図書館の司書さんが画期的なシステムの存在を教えてくれた。その『サイコロジカル・アブストラクト』がパソコンで検索できるというのである。すごいと喜んだものの、金額の高さにまたびっくり。正確な金額は覚えていないが、代理店になっている書店を通じてアメリカのサーバーにつなぐとかで、30分もやると1万円くらいは軽くいっていたような気がする。アルバイトと奨学金で大学院に行っていた私には覚悟を決めてから検索システムを使った。

どんな研究分野でもそうだろうが、心理学はこれまでどんな研究が行われてきたのかをきちんと調べてから研究計画をたてる必要がある。それまでの研究の成果を踏まえて研究していくのだ。もちろん同じ方法で研究を追試してみることだってかまわない。同じ結果が出るのか確認してもいい。自分の発想で少し方法を変えて見ることもできるだろう。心理学に文献検索の手続きは欠かせない。

心理学を勉強したいと思っているのであれば、図書館の文献検索のシステムを一度試してみるといい。『ProQuest』と『PsycINFO』は世界中で活用できるように使用言語が英語なので、初めにやるには難しいと思ったら、日本語で検索できる『医中誌(医学中央雑誌)Web』や『GeN ii(ジーニイ)』などから始めてもいい。大学は自分のテーマを探して勉強していいところである。自分の大切にしているテーマはどんな風に研究できるのかを、文献で知ることができる。もし自分の中にまだテーマがはっきりしていなくても、いろいろな文献にふれて探すこともできる。インターネットで知った知識とは、ちょっと違った知識を得ることができる。このチャレンジは楽しい。

留學生活と図書館

文字の世界に魅せられて

基盤教育院長・教授 畑山 浩昭

本屋が好きだ。特に、駅周辺によくあるような店。少し大きめの規模で店内は明るく、ちょっと立ち寄ったという感じの客が多いところ。こんな本屋では、それぞれの本が精一杯着飾っていて、「私を手にとって!」「ちょっと読んでみて!」と言いたげに並んでいる。色合いが鮮やかな本、タイトルが大きな本、著名人が推薦している本など、そのプロモーションも多彩だ。ついついそんな誘いにつれて、いろんな本に手を出していると、あっという間に時間がたつ。どの本もまだ新しくて、見かけが魅力的で選ぶのに困ってしまう。

古本屋にもよく行く。置いてある本は色あせているものが多く、場合によっては少し破れていたりする。店内も少し暗かったりして。本のタイトルに使われた語句に時代を感じさせるものも多い。「まだオレに用があるのか?」みたいな態度の本。「これでも私、ずいぶん売れたのよ」と自慢する本。ここでは本とのつきあい方も変わる。週刊で消費されたマンガや雑誌でさえ、古本屋に置かれると、ひとつの社会や文化を創ったのだという自負が見え隠れし、時代を反映する大事な資料となっている。なので、古本は敬いながら手に取る。

ただ、書店だけで本と接していると、本について偏った認識に陥っていることに気づくことがある。書店では、新刊でも古本でも購買を前提として本を見てしまう。あたりまえだが、書店では本は売られて買われるもの。本の内容ももちろん大事。でも、多くの客に買われることのほうがもっと重要なだろう。だから本は着飾ってみたり、重厚に振る舞ってみたりする。売れ始めると店頭におかれ、平積みにもされる。新しくても古くても、売り買いの舞台で見事に脚色された本に、ついつい手を伸ばしてしまうのだ。自分でも困ったものだと思う。

そう考えると図書館はまったく別の空間だ。本の購買や脚色から離れて本と向き合える場所である。図書館の思い出をひとつ書く。米国留学している時のこと。大学院の課程を修了する要件として、中世英語で書かれた文学の講義を履修しなければならなかった。日本語人の私にとっては「現代英語でさえ苦労しているのに、古い時代の英語なんかわかるわけじゃないじゃん!」と思ったが、文学史の基礎でもあり仕方なく履修した。その講義の最初の授業のこと。テキストがまるでわからない。苦笑していたら、さらに厳しい状況になった。

担当教授が、学生一人一人がまとまったセクションを読んで、その内容について発表する授業形式を義務づけたのだ。アーサー王についての物語だったが、私が担当することになった部分は、有名な騎士であるトリスタンの話。



このピンチに、まず駆け込んだのが大学の図書館。検索画面でキーワードを叩く。「アーサー、キング、日本語、訳」など、自分に都合のいいものをいろいろ試す。もちろん、No Results 日本語による翻訳文献などあるわけがない。それでもやっとの思いで探し当てたのが現代英語に完全に翻訳している本。すぐる思いで所蔵場所をチェック。90マイルほど離れた別の州立大学の図書館にあるとのこと。取り寄せている暇はないので、他大学図書館の利用許可証を発行してもらって車で向かう。

翻訳書の実物を初めて見た時に、本の厚さをみてまず気が遠くなる。さらに、本を開いて、現代英語で書かれてはいるものの、表現の複雑さにめまいがするほど。結局、中世英語の原文と現代英語の翻訳文と英英辞書を三角形に広げて、一語一文ごとに格闘した。何時間かかったのかは覚えてないが、ずいぶん長い間、図書館にいたと思う。その後も、中世の文化社会に関する文献や、テキストについての批評文、批評に関する方法論やアプローチ等、この授業のために何回も図書館に通ったのを覚えている。

留学中は、様々な講義の課題をこなすために、図書館と教室の往復を繰り返す日々だった。図書館で本を読むことに多大な時間を費やす生活を続けると、どうしても、本の世界と現実の世界の対照について考えるようになる。人間が日々の生活の中で、現実として認知している世界と、ことばで表されている世界のズレみたいなものを感じる一方で、ことばで創造した世界に現実を合わせる力を人間は持っていることを発見したり、現実として認知する世界をことばで表すことには限界があることに気づいたりするのだ。じっくりと本を読む時間を与えられた人にしか体験できないことであろうが、これこそ大学で学ぶことの特典のひとつであるように思える。

駅前の書店、古本屋、図書館。読みたい本、読まされる本、いろいろあるが、人間の思い、考え、経験などを、なんとかしてわかる形にしようとした結果が本。その本に力が宿ると、読んだ人々の思考や行動に大きな影響を与える。このパワーに惹かれるのだ。これからも魅力的な本には、どんどん手を出したい。

NGOと図書館

国際協力は図書館で学ぶものである

リベラルアーツ学群教授 牧田 東一

図書館で、よく机に突っ伏して眠っている人を見かける。図書館なので、いびきをかいて周りに迷惑をかける人はいない。図書館では静粛にしなければならないからである。それにしても、本当にすやすやと気持ちよさそうに眠っている。図書館は静かであるし、冷暖房も心地よく、きっと安眠場所のベスト5には入るのだろうと思う。

筆者は、リベラルアーツ学群（1年生）・国際学部（2・4年生）で国際協力・国際交流の科目を担当している。担当している科目は、「国際協力論」「NGO論（国際協力入門）」「国際交流論Ⅱ」「国際学インターン」などである。これらの科目は、国際協力や国際交流に関心のある多くの学生さんが毎年履修している。全ての科目に共通しているのは、学期ごとに2冊ずつの参考文献を読んでの読書レポートが必須とされていることである。比較的課題の多い科目ではないかと思っているが、そして、2冊は多いと文句を言う学生もいるし、それが理由で科目を取らない学生もいるらしい。

学期末の授業評価では、「最初は大変な負担だと思っていましたが、本が読めたのがこの授業の最大の利点でした（講義は役に立たなかったということか？）」「この授業を取らなければ、こういう堅い本を読む機会はなかったと思います（授業で強制しないと本を読まないのか？）」などという、お世辞かもしれないが、高い評価をくれる学生が多く、この慣習を続けている。毎学期、大変な数の読書レポートを読まねばならず、教師としては実は大変なのであるが、その点はなかなか理解されない。

いいレポートに良い点数をつけて返すと、多くの学生がなんと満足気な表情をする。つまり、本と格闘し（ときどき、格闘する相手を間違えて、難解な本に挑戦して討ち死にする学生もいる）何とかまとめあげた達成感とそれが認められたときの嬉しさだろう。授業で、これほど嬉しそうに学生の顔を見ることはない。ときどき、こっくんと首をたれて眠りかかっているいつもの表情とは雲泥の差である。本を読むということは、そして、読んだ内容を誰かに伝えるということとは、それほどに楽しいことなのである。

教師としては、非常に残念なのであるが、学生さんたちは教えたはずの内容を翌年にはほとんど覚えていない。せいぜい、片言の日本語らしき単語を繰り出すだけである。「ほらあの、みんなが一緒になって、考える『あれ』」、「専門家ってけっこう間違えるって言ったジャン、『あの』」。。。（参加型開発です）。しかし、読んだ本の内容はしっかりと身についている。著者の名前はうる覚えになっても、内容を誤解して覚えていたとしても、もう一度読み返せば内容の細部はすぐに確認できるし、それを読んだ場所、桜美林大学図書館の静寂もほほに伝わる机の冷たさまでもが、よみがえってくるはずである。

大学で学ぶということは、実は本を読むことなのである。授業は、単なる読書案内であって、こんなに面

白いテーマがあるぞ、それにはこんな良い本があるぞということを知るために、読書の先人である教員が親切にも解説してくれる機会がたくさんあるのが大学の授業なのである。ここが、高校までの授業と決定的に違っている点である。大学図書館には、なぜあれほどの数の書物が揃えられているのか、たかだか本を読むために、何であれほど多くの司書などの人々がいるのか、なぜ、あれほど快適な読書室が設けられているのか。それはつまり、大学図書館こそが大学における勉強の場であり、最も大切な場所だからである。大学とは図書館のことであり、そこに足を運ばない学生は大学に行っていないに等しいと断言してもよい。ドキッとした人は、今からでも遅くない。



国際協力というと、頭より体、汗をかくことであるなどという妄言を信じる人が日本にはまだ多い。NGOはボランティアで、何もできませんが力仕事ならば、などと考えると大間違いである。国際協力でプロとして仕事をする（きちんとした給料を安定的にもらう）ためには、3種の神器ではないが、3つの資格が必要だと言われている。第1に、途上国での2年以上の勤務体験（あなたの精神力と胃袋の力を証明してください）、第2に、修士号（あなたの知的体力を証明してください）、第3に、TOEICで850点程度の英語力（あなたが、国際社会で仕事ができることを証明してください）である。勉強しなければ、国際協力は何もできません。

そして、国際協力を学ぶとき、とても困るのは、そして同時にとても楽しいのは、意見の対立が非常に多いということである。国際協力が課題としている世界の貧困、環境問題、紛争と平和、女性や子どもといった社会的弱者などの問題は、はっきりいって難問である。専門家たちは、それぞれの立場から、これこそ問題の真の原因であり、これこそが真の解決策であると自信ありげに主張する。しかし、過去の国際開発の歴史をみれば明らかなように、それぞれの時代には主流派の理論があり、それに挑戦する理論があり、そして結論的にはどちらも間違いであったということが余りにも多い。それらが、全て無駄であったということではない。何らかの成果があっても、それでは解決されない問題が残ったり、あるいは新たな問題が噴出したというのである。

「冷戦の時代」とされた20世紀後半は、実は「開発の世紀」であったというのはたぶん正しい。史上例のない人口増加にもかかわらず、極めて多くの人々の命と暮らしが大幅に改善された。だから、本に真実が書かれていないということではない。それだけが真実ではないということ、対立する意見にも耳を傾け自分で考えること、そのための読書であると悟ること、これが国際協力の勉強の仕方の極意である。つまり、「国際協力は図書館で学ぶもの」でもあるのだ。最後に、もう一つの極意を。「図書館で眠るときは10分程度が適当である」。

教養と図書館

「教養」の場としての図書館

リベラルアーツ学群准教授 鄭 百秀

教養への回帰

いま、大学教育に何が求められているのでしょうか。単に個別の授業で専門的知識や技術を教えるだけでなく、学生個々人が全人的な総合能力を養う、いいかえれば、「教養」を深める場を提供することが、21世紀の日本の大学に与えられたもっとも大事な役目ではないのでしょうか。教育の効率化、情報化、国際化、学際化など、さまざまな変化が模索されている状況であるからこそ、大学は、「教養」の場の構築という本分をより充実した形で全うしなければならないのです。現在桜美林大学にも、授業カリキュラムと教育プログラムの改編、学群・学科の再編など、新しい時代に向けたさまざまな改革が、他の大学の注目を集めるスケールで、大胆に進められています。こうした「桜美林改革」の多くはまさに「教養」教育の質的向上を目標にして行われていることはいまでもありません。たとえば、2007年度には、経済・国際の旧二学部と旧文学部の一部をリベラルアーツ学群に統合しましたが、それは確固たる「教養」の場を構築するための組織改編だったのです。



教養とは

そもそも「教養」とは、どういう概念でしょうか。周知のように、「教養」という言葉は、英語の *culture* ドイツ語の *Bildung* の訳語として、明治期の「修養」を経て、大正期の教養主義の流行の中で一般化したものです。 *culture* あるいは *Bildung* の原義からもお判りでしょうが、「教養」とは、自然のうちにはない文化的刺激を与え、人間の精神を養うこと、すなわち、真の人間としての高貴な人格を備えるよう、育成することです。直接的かつ具体的には、社会生活を豊かにするために、学問・芸術を身につけることを意味する

場合が多いのです。ここで忘れてはならないのは、「教養」の場には、必ず個人の「自由」が前提されるということです。歴史的にみても、人格を向上させる、あるいはよく生きるために「教養」の力を高めることが人間生活の中で問題になりはじめたのは、おそらく社会のさまざまな封建的システムが解体して、個人が「自由」に生きることが許されるようになった、近代に入ってからなのです。したがって、人生を豊かにする知識を、授業やセミナーを通して、一方的に教わる、あるいは勧められることによって、「教養」が形成されるのではないということは明らかです。「教養」には、よく生きることを個人が「自由」に選択しなければならないという条件が含まれているからです。こうしてみると、「教養」とは、人間の精神を養うさまざまな学問・芸術を学び、人生を豊かにするために自分なりにそれを組み立てることと定義されるでしょう。自分の豊かな人格を自ら形成する力、それこそ「教養」の核心であり、いま大学生個々人が追求しなければならないもっとも重要な価値なのです。

教養のために

それでは、われわれは大学生活の中で、これからの人生のために「教養」をどのように修得すればいいのでしょうか。もちろん、「教養」は「自由」を行使することによって得られる力ですから、そこに一つの模範的解答があるわけではありません。もしもっとも便利なある方法があるとすれば、その方法によるものは、きっと、自分の「教養」とはいえない、単なる他者の知識の集積になってしまうでしょう。授業やセミナーを通して行われる教育が、そのまま「教養」を伝授する営みにはなれないのはそのためです。自然科学、人文科学、社会科学、そして学際領域の多岐にわたる教育カリキュラムは、「教養」をデザインする素晴らしい素材ではありますが、われわれに直接「教養」への道を指示するものとしては不十分です。結局、学生ひとり一人の「教養」とは、さまざまな授業やセミナーから必要な知識を習い、組み立て、そしてそこから問題を発見していく、「自由」な「学び」と「問い」によって、育て上げられるということです。

そして、授業やセミナーで紹介された専門的知識や技術を「教養」として身につけるためには、図書館の利用が絶対に必要だということを、ここで強調しておきたいと思います。大学図書館は、「教養」の素材になる膨大な量の知識と情報を体系的に管理し、的確な文献と資料についてガイダンスしてくれます。また、大学生活の中で学生個々人がこつこつと自分ならではの「教養」を築いていくのに、もっとも便利な空間をも提供してくれます。その点において、図書館とは、大学の「教養」学習の中心であり、リベラルアーツという桜美林大学の新しい教育理念、すなわち「自由」な「学び」と「問い」を実践する最前線なのです。

読書と図書館

学生諸君、古典を読もう！

リベラルアーツ学群准教授 片山 博文

先日、私は、「図書館読書運動プロジェクト」の学生メンバー諸君とともに、「桜美林コメント大賞」の選考会を行った。これは、学生諸君に本を読んだ感想を生協の「コメントカード」に書いてもらい、その中で素晴らしいコメントを表彰しようという企画であるが、その選考中に気がついたのは、応募コメントはどれも最近の流行作家の本ばかりで、いわゆる「古典」を読んでのコメントがほとんどない、ということだった。



古典とは何か。広辞苑によれば、古典とは「いつの世にも読まれるべき、価値・評価の高い書物」とある。結果論的に言い換えれば、時の風雪に耐えてきた本なのだから、読む価値がある本なのだ、ということなのであろう。私の学生時代は、古典を読むというのはカッコいいことのひとつで、

私を含めみんな分かりもしないのにヘーゲルとかマルクスとかにトライしていたものだ。分からないからみんなで読もうという話になって、読書会を開いたりするのだが、それでもやっぱり分からない。みんな自己流の解釈を言いあったりして、結局は結論も出ずじまいなのだが、それはそれで面白かったし、たぶん何かの力になったのだと思う。

ところが近年、古典を軽視する傾向がはなはだしい。最近でも、かの立花隆が、「古典不要論」を唱えていた。昔の人が考えたことは素朴すぎて、複雑に発達した現代社会を読み解く上でほとんど役に立たない、というのだ。立花の言うことにも一理あるけれども、私はそれでも古典を読む意味はあるし、学生諸君は古典にトライすべきだと思う。

いまの学生諸君は「分かりやすさ」を求める。だから読む本も、分かりやすく、親しみやすく、とっつきやすい本が中心となる。しかし古典は、多くの場合、とてもとっつきにくい。それはその古典が書かれた当時の時代背景とか、著者の思考回路の特徴とか、いろいろな理由があるのだが、私は、そうしたとっつきにくさは、古典の持つ「癖」のようなものだと思う。個性的な人間を「癖のある人間」と呼ぶように、本にも癖のないのっぺりとした本と、癖のある個性にあふれた本とがあるのだ。

例えば私は、2007年度からリベラルアーツ学群で「マルクスを読む」という授業を始めた。これは文字

通りマルクスを読もう、分かりやすく解説した本ではなく、マルクスの文章そのもの（ただしもちろんドイツ語ではなく日本語の翻訳で）をがんばって読もう、というコンセプトの授業である。マルクス『経済学批判』の有名な「唯物史観の公式」の文章から始まって、エンゲルス『空想から科学へ』でマルクス主義の大体のあらましを説明し、その後にマルクスの主著『資本論』から1、2章を抜粋して読む、というのが授業の概略だが、最初の「唯物史観の公式」を読み上げたときからすでに「先生、ぜんぜん分かりませ～ん！」と学生諸君の泣きが入った。私の普通の授業は、学生の授業アンケートでだいたい9割くらい肯定的な評価をいただくのだが、この授業は「後輩に勧めたい」と「勧めたくない」がまさに半々、はっきりと分かれてしまった。私はこれも、私の教え方のせいではなく、マルクスの「癖」のせいだと思っている。マルクスの「癖」にハマってしまったか、拒否反応を示したかが、こうした結果となって表れたのだ。

「癖のある人間」は、付き合うのはシンドイが、その付き合いから得られるものもまた大きい。噛み砕いた流動食のような子どもが食べるような本ばかり読んでいると、「癖のある人間」を認め、付き合うキャパシティを失ってしまう気がする。また「癖のある人間」は、自分だけの、自分の頭で考えた「ストーリー」を持っている。私は、「ストーリー」をつくる能力を非常に重視していて、学生さんのプレゼンを指導する際にも必ず「ストーリーづくり」を強調するのだが、古典とは、癖のある人間が自分だけのストーリーをつくりだそうと格闘した結果なのだ。例え即効性はなくとも、学生諸君がその格闘を自ら追体験することで得られるものは大きいはずである。

およそモノを書くことを職業とする人間にとっても、「古典を書く」というのは最大の野望の1つだろう。かく言う私も、後世の人々に読み継がれる古典を、いつか書きたいものだと思っている。

先生方にはお忙しい中、それぞれの大学生時代を振り返りながら、また、これまでの体験を踏まえつつ、貴重なインタビューや助言を寄せて頂きありがとうございました。学生の皆さんは、これらのメッセージを読む中で、たとえ自分の専門分野とは違っても、そこに何か共通したものが流れていることを是非読み取って頂きたいと思います。

図書館長 永瀬順弘

図書館読書運動プロジェクト活動報告

三浦しをんさんとの拡大読書会と読書マラソン表彰式

2008年1月17日に、直木賞作家の三浦しをんさんをお招きして、拡大読書会が開催されました。

また、これに先立って、コメントカードを1000枚集めることを目標に掲げて展開されていた、2007年の読書マラソンの表彰式もおこなわれました。こちらでは、コメント提出者の中から選ばれた、コメント大賞、学長賞、図書館長賞などが表彰されました。コメントカード1000枚を目指していた読書マラソンは、出だしのペースはあまり良くなかったものの、締め切りまでに最終的に847枚のコメントカードが集まりました。あともう少しで1000枚達成でした、、、実に惜しい・・・



読書マラソン表彰式の様子

学生たちは、この拡大読書会に備えて事前に読書会をおこない、しをんさんにぜひたずねてみたい質問事項や質問の順番、話の流れのつくりかたなども、ある程度シナリオを描いていたようです。そのような努力の甲斐もあって、拡大読書会での話の流れは非常にテンポが良く、様々な切り口から、しをんさんの思いや意気込みをきき出せたのではないかと思います。

この読書運動プロジェクトの1年目（2006年）は、参加する学生の数もまだ少ないところがありましたが、今回は、多くの学生たちの積極的な参加と企画・準備によって進められました。しかも、今回の参加メンバーには1年生が多く、拡大読書会の開催に向けた準備を進める中心になったのも彼らでした。

ちょっとしたきっかけや出会いによって、未知や未体験のことにもどんどん挑戦して成長していく学生たちに感心するとともに、図書館からもエールを送っていきたくと思った瞬間でした。今後の読書会の発展が大いに期待できますね。

学生たちの力作のプレゼンテーション（この読書会のために事前におこなったアンケート調査の報告）に続いて始まったトークセッションは、1時間ちょっとの時間でしたが、作品のキャラクターの話から始まって、町田のこと、しをんさん自身のことなど、多岐に渡るお話をきくことができました。



学生のプレゼンと、それに興味津々の三浦しをんさん

拡大読書会の様子をお伝えすると・・・

しをんさんとのトークは、今回の読書会の「お題」（参加者が事前に読んでくるもの）である、しをんさんの著書『まほろ駅前多田便利軒』に登場するキャラクターのことを口火に始まりました。「ストーリーの中で登場するキャラクターは、どのようにイメージしているのか?」「行天と多田のどちらが好きか?」、そこから「結婚するならどちらが良いか?」というような質問にも発展し、「それは、究極の二択ですね～」「どっちも嫌ですね...」、「そう言われてみると、今までの作品では自分の理想とするような人物を描いていないかもしれませんね～」というようなお答えでした。

参加していた男子学生からは、「『つきあうのは良いけど、結婚相手としては嫌』と言われるのも、『結婚相手としては良いけど、つきあうのは嫌』と言われるのも、男としてはどちらもつらいなあ...」という話もありました。

読んだ人の大半が感じていたように、『まほろ...』を書くにあたってモデルにしたのは、桜美林大学も存在するこの“町田市”でした。町田の古本屋でアルバイトをしていたお話、読みたい本の品揃えが良い本屋が何軒もあるので、町田をなかなか離れられないこと（今さら、他の街でいちから本屋を開拓するのは面倒）等々、町田の話題でも盛り上がりました。学生からは「横須賀も面白いですよ、今度は、横須賀を舞台に何か書いてみませんか?」という提案もありました。



学生との質疑応答の風景・終始なごやかな雰囲気ですめられた

しをんさん自身や作家としてのお話では、私立の中学・高校に通っていたので、都立高校に相当なあこがれがあったこと、男性のことや今の女子高生のことなどは、自分で体験できるものではないので、「描きたくてもリアルに描くことができない」と限界を感じることもあること、また、エッセイや原稿を書くにあたっては、一球入魂で、抱えているものはすべて全力で取り組む姿勢でいることなど、作家としての熱い思いもきくことができました。そのほかに、りんごの上にタバコが1本立ててある『まほろ...』の表紙のデザインが、どのように決まったかというお話等々、作家本人と関係者しか知らないようなお話もうかがうことができました。

読書会終了後には、学生たちは今回の読書会が盛況だったことを喜び合うとともに、「来年度は少なくとも年に2回はこのような拡大読書会を行って、読書会自体の輪も広げていきたい」と、次年度にかける意気込みを語り合っていました。

三上（図書館情報サービス課）

図書館紹介

『四谷キャンパス図書室』の紹介

本年 4 月より、四谷に新しい大学院の校舎がオープンし、今まで新宿キャンパスで行っていた大学院の授業が四谷キャンパスで行われます。

その地下 1 階に 3245 の『四谷キャンパス図書室』が新設されます。図書室は、国際学研究科（国際学専攻 国際協力専修、言語教育専攻）、大学アドミニストレーション研究科、老年学研究科の大学院生と教員に、三到図書館と同等なサービスを提供します。新宿キャンパスにあった図書を BDS（無断持出防止装置）対応の、OPAC（オンライン蔵書目録）から検索可能な状態にし、大学院の図書室として充実を図ります。

詳しくは、次号でお知らせします。（事務長）



図書館利用案内

大学図書館 入門編

これまでみなさんは小中高等学校の図書館（学校図書館）や地域の図書館（公共図書館）を利用してきたことと思います。では、みなさんがこれから利用することになる大学図書館がどんな所か、簡単にご説明しましょう。

まず、大学図書館は学生・大学院生や教員を対象としているので学習や教養のための機能と、調査研究のための機能をもっています。そのため蔵書は娯楽的なものより、学術的な性格のものになっています（とはいえ話題の小説やスポーツ誌などみなさんが楽しめるような資料もあります）。

また、大学の教育方針に沿っているので、本学図書館では中国書やキリスト教関係の資料も数多くあります。さらに近年は冊子体の資料だけでなく、電子資料も増えています。

それらの資料を活用していただくため、図書館では資料の探し方やデータベースの使い方などのガイダンスを随時行っています。それ以外のときでもわからないことがあったら、図書館員にお尋ねください。図書館がみなさんの学習の場に、また憩いの場になるよう努めています。 矢部（図書館情報サービス課）

図書館蔵書コーナー紹介 教員をめざそう！

図書館では、中学・高校の教員を目指している学生や教育学に興味のある学生のために、教育実習にも役立つような、中学・高校で使用している教科書（一部小学校のものもあります）と指導書、学習指導要領などの関連図書の充実を図っています。



学生のみなさんが中学生・高校生の時に使用していた見覚えのある教科書だけでなく、見たことがないものもあると思います。中には、一つの科目でも教科書が 10 種類近くあるんですよ。少しでも興味を持った方は、是非のぞいてみて下さいね！

中島（図書館事務課）

Q：どこにあるの？

A：4階にあります。

教科書は・・・

請求記号が 375.9/・・・のところ

学習指導要領は・・・

請求記号が 375.1/・・・のところ

にあります。

このまわりには、教科書の関連図書も並んでいます。